

令和5年度 第3回 小田原市社会教育委員会議 概要

- 1 日 時：令和5年12月18日（月）午後3時から
- 2 場 所：小田原市生涯学習センター本館 第2会議室
- 3 委 員：木村議長、有賀委員、岩崎委員、小田中委員、加藤委員、箕輪委員、山本委員
- 4 職 員：菊地文化部長、湯山文化部副部長、田村生涯学習課長、蓑宮生涯学習課副課長、遠藤生涯学習課副課長、一寸木生涯学習課生涯学習係長、石井生涯学習課社会教育支援員、鈴木子育て政策課長、黒澤子ども若者支援課子ども若者相談係長、早野福祉政策課総合支援係長、小林教育指導課指導主事、広瀬教育指導課主査、藤平生涯学習課主査
- 5 傍聴者：なし

6 概 要

1 文化部長挨拶

菊地文化部長から挨拶をした。

2 協議事項

今期研究テーマの協議について

・「みんなで子どもを育む学び」（家庭教育支援）

資料1に沿って事務局（蓑宮副課長）から説明した。

【木村議長】それでは、まず、山本委員から、mama's hug やファミリーサポートセンターでの活動等、子育て支援の最前線の現場の様子や声をお聞かせいただきたい。

【山本委員】私が立ち上げた「mama's hug」という団体のミッションは、産前産後の鬱をなくすること。そのために、まず、違いがあっても、その違いに対してどうやって仲良くするのか、その子は何を思っているのかをワークショップとしてやりながら、1時間ぐらいのタッチケアをしている。また、子育てする土台の環境も考えなければいけないと思い、ゴミと一緒に拾うというコミュニティ事業もしている。誰が来てもいいというサロンを4つ開いている。市の事業「ファミリーサポートセンター」を受託している。地域食堂の経営を受託し、二宮神社と一緒にやっている。

この20年の中で、触れること、見つめること、触るということが、今、すごく少なくなっている。特にこのコロナ禍で、切り取り型の子育てになっていて、例えば、沐浴だけの動画、おむつ替えをするだけの動画を見て、その前後の営みが見られていない。泣いた赤ちゃんへの声掛け、抱き方が分からないお母さんもいる。そして、助けを求めることと味方を作ることが、ものすごく減っている。

その理由は、いろいろな背景を持つお母さんたちがいるが、大きく分けて2つ考えられる。1つは、自分が親からちゃんと愛情を受けておらず、愛し方がわからない、自分がどういう助けを求めているのかわからないというお母さんがいること。もう1つは、育児も、仕事も、家事も、パーフェクトな親の背中を見て、自分とのギャップに

落ち込み、助けを求めるということは自分が自立していないこととして感じているお母さんたちが増えていること。助けを求めることができないので、愚痴を吐いたり、自分の味方を作るということがとても苦手なのかと思う。

それに対して、mama's hug では、まず、触れることとしてタッチケア、助けを求めることについてはママ学校での啓蒙や SNS での発信をしている。味方を作ることというのは、ファミリーサポートセンターが発揮できる大きな仕事の 1 つである。子育ては、親でなくてもできることを他人に頼ることと私は思っている。

今後できたら良いと思っているのは、お腹に赤ちゃんがいる時からファミリーサポートセンターに登録し、生まれたときに生協などを活用して買物の負担を減らす、産後に家事支援を頼む、ファミリーサポートセンターだけでなく民間事業者にも家事支援の幅を広める、「はーもにい」など子育ての相談先紹介など、各プレイヤーの方たちが一堂に会して、これから生まれる赤ちゃんのためにお母さんたちのケアができる形をつくること。また、育児休暇を終えた時に、どういうライフワークバランスが作れるのかを、前もって計画を立てる。こういった形のイベントを立てながら、民間、行政、地域が協働した循環型の子育てができるといいと考えている。

ファミリーサポートセンターの支援員が本当に少ないので、ファミリーサポートセンターで楽しく学び直しができる地域の人が集い、地域で子育てできるチャンスにつながるかと思い、ファミサポ大学の取組みを始めた。

2020 年にユニセフで発表された「子どもの幸せ指数」には、精神的幸福度、身体的幸福度、スキルがあり、先進国 38 カ国の中で日本は身体的幸福度が 1 位と高い一方で、精神的幸福度が 35 位、コミュニケーションに関するスキルが 27 位と低くなってしまう。幸福度で何が大事かというと、大人が幸せであることと自己犠牲が少ないことと言われている。また、養育者が困った時に人に頼れる人数と、子どもの幸せ指数は比例している。

高齢化ということは、子どもを支援する、子育てを支援する人が増えているのではないかと考える。その方たちが生きがい、関わる人たちが生きがい就労としてファミリーサポートセンターに登録して、一緒に子育てをしてくれることは理想だと思う。

子どもにとってパーフェクトな親は、あんまり求められておらず、親の背中を良いも悪いも全て見せるのが家庭教育なのかと考えている。

【木村議長】有賀委員が都合により退席する予定なので、ここでご発言をお願いしたい。

【有賀委員】地域子育てひろば事業で関わっている私の地区では、この 2 年間で参加人数がとて多くなった。その理由の一つ目は、役員同士協力して仕事を分担して、楽しく活動しているということ。二つ目は、活動内容が工夫に富んでいること。三つ目は、毎回ボランティア 2 名と民生委員 1 名のサポートがあり、安心して子どもたちを見てもらえること等が挙げられる。ただ、未就園児が参加対象なので、子どもが対象から外れると必然的にお母さん方も引退となるため、今後は役員の後継者不足が懸念される。

放課後児童クラブの関連事業として、放課後子ども教室に関わっている。放課後子

ども教室では、終了後に、児童クラブに参加する児童も見られるので、放課後児童クラブと、放課後子ども教室との連携というところで、今後児童クラブのプログラムに、子ども教室の子どもたちが参加できる機会があれば、子ども同士、スタッフ同士の交流の場にもなると考えられるので、お願いしたいと思う。

コロナ禍以前は、子ども教室と児童クラブのスタッフと直接話ができる機会があったが、最近はなかなか難しいので、もう少し子どもたちの情報を共有できる機会があると良いと思う。

(ご都合により、有賀委員退席)

【加藤委員】例えば「おだわらっ子の約束」は、道徳を始めとしていろいろな場で使っているが、小学生には10項目はやや多い。例えば、橘中学校区の小学校3校では、特に、「3つの『あ』」として、「あいさつ」「安全」「朝ごはん」ということに特化して家庭に働きかけている。

小学校は、家庭での支援が本当に必要なところである。特に小学校1年生に関しては、家庭の方の支援が必要で、しっかり関わって、同じものを見つめて、見つめ合って笑ったり、褒めたりする活動が一番大事で、そういうところで言語感覚を身につけたり、心を豊かにしたり、愛されているという実感を得る。それが上手くいくと、宿題ではなく家庭学習につながる喜びに変わり、自ら学習に向かうことになると思う。

【箕輪委員】おそらく、子どもの年齢層、各世代で親の関わり方も大きく変わってきて、親としての知識が必要になっている。助けてほしいとか、頼りたいということの表現の仕方が難しくなったというのは、個人的に感じている。みんなで何かをするという機会が、この3年で無くなってしまったので、大人もどこまで踏み込んで、皆で声を上げていいのか、計りかねていて、それを子どもたちも不安げに感じるようになっているのではないか、という印象がある。

親も一緒に学ぶという点が、今、問われているのではないか。そこをどう負担感なく向かって行くかというところが、一番の家庭教育かと多々感じ、親あるいは信頼を置ける誰かが、一緒に同じものを見つめて、共有して、感じられるという時間が取れると、本当はいい。これが小学生低学年までの間にできると、その後、少しずつ安定感が増すのかと思う。

【岩崎委員】日本の子どもの幸福度については、親たちの余裕の無さ、あくせくしているところというのが、35位という順位に現れているのかと思う。スキルというところで、コミュニケーション、人としての交流を、最初の単位の家庭、家庭教育で教えていかなければいけないところを、親のせわしなさであるとか、親自身が自分の人生をどの様に生きて行きたいかと、子どもが次になっているか、といったところが現れているのかと思った。

【小田中委員】「おだわらっ子の約束」は、子どもだけではなく、地域の大人たちも約束を守る、と

いう点の発信が弱いと思っていた。もっと発信の仕方があるのではないか。新たな教育振興基本計画になったのは、学校だけではなく、社会総ぐるみでやりましようとなっている。「おだわらっ子の約束」についても、学校と社会教育が連携して、どうコーディネートしていくのか、どこに支援をしていくのかというのが大事である。

【木村議長】資料の２ページにある「条例制定に向けた事例研究・調査等」というところについて、各委員の意見を伺いたいので、事務局から説明をお願いしたい。

・主な取組「条例制定に向けた事例研究・調査等」について事務局（蓑宮副課長）から、「（仮）家庭教育支援条例」の制定について、現在の総合計画における位置づけや検討の動き等を説明。

【木村議長】家庭教育支援条例が必要か不要かという意見は様々かもしれない。仮に、条例というものを作ったとしても、作っただけで終わりではなく、それが市民一人ひとりまで行き渡るようでないといけないと思う。では、皆さんからのご発言をお願いしたい。

【加藤委員】「おだわらっ子の約束」のほうが、絵本にするアイデアなど具体的にイメージできる良さがあるが、今、「家庭教育支援条例」の必要性を問われても、どのような施策なのか見えてこない。

【箕輪委員】「条例」と聞くと、とても堅いものという印象がある。「家庭」と一言と言っても、現在は様々な家族の姿があるので、果たして当てはまるのかという疑問も感じる。家庭教育支援のことは、より具体的な話を様々な計画の中で積み上げていけばよいのではないか。その方が、その時々において臨機応変に、また着実に実効性のあるものになっていくかと思う。

【山本委員】先ほど話があった「おだわらっ子の約束」について、どうしたら伝わるかとか、どう落とし込んでいくかという方が私には響いた。条例ではなく、この「おだわらっ子の約束」について話し合って、何か面白いツールを小田原の中で作っていくのが、言葉がそのまま家族の中での行動につながって面白いと思う。

【岩崎委員】この前、埼玉県で子どもの留守番を虐待とするような条例案が撤回された事例があったが、実効性の高い、家庭に入り込むような条例を作るのは、難しいとは思う。もし、その条例を作るならば、「おだわらっ子の約束」のような、家族のふれあいを通して、生活習慣や、人との信頼感、思いやり、基本的倫理観というところを小田原の家庭は目指す、というやわらかいものなのかなと思う。

【小田中委員】要は、結局「見える化」が必要なのかなと思う。例えば、このことで悩んでいる家庭は、ここに相談してくださいというフローチャートのように、今、単体でやっている

ことを整理したものがないので、もっと市としての方向性を示した方が良いのではないかと思います。「おだわらっ子の約束」も、社会教育としてどう捉えて、子どもたちに焦点を当てたとすると、どういうふうに地域社会があるべきか、大人としてどうあるべきかを発信し、そのために足りないことはこう補える等、様々な取り組みが紐づいている状態が「見える化」できれば良いと思う。

【木村議長】最終的には、家庭に踏み込み過ぎれば反発があるだろうから、仮に作るとしても柔らかな表現の方が良いかと思う。ただ、ほかの地域の真似をして作らなくても、小田原市には、「おだわらっ子の約束」があるから、これを推進していくという形でも良いと思う。

【小田中委員】今、私たちができるのは、そこにあるものを使ってはどうかということ。現状の把握と、こういうのも入れた方がよいのではないか、地域住民の意見であったり、子どもの意見であったり、周りでこれをどう生かしていくか等、人々が集まってワークしたほうがいい。

今後に向けては、何か一歩動かないと難しい。それは、子どもを中心に据えて、主体的に考えさせる子どもたちを作りながら、地域住民の主体的に考えられるような、流れを取っていったほうが、より良いものが、出来上がるのかもしれない。

【加藤委員】「おだわらっ子の約束」の「早寝 早起きして朝ごはんを食べます」ということも、家庭によっては本当に様々で、子どもの責任ではないので、そこは難しいところもあると思う。ただ、これが約束の最初にあるということは、健康で、元気で、命あることが大事ということなのだと思います。子どもだけではなく、親の責任、地域と一緒にやっていくというところにしっかり落とし込む必要はある。親世代、大人がしっかりこれを守っていかないと、子どもは辛いというところも伝えていく必要があると思う。

【箕輪委員】おだわらっ子の約束の「早寝 早起きして 朝ごはんを食べます」を守るのは、働く女性が増えている中で負担に感じる部分だと思う。小田原に朝食を食べられる子ども食堂があると、働くお母さんたちの移住増にアプローチできるかもしれない。朝食を一緒に食べながら、生活の中のことを共有できれば楽しくなるかと思う。

【山本委員】「おだわらっ子の約束」は見れば見るほどいいと気づいた。大人も子どもも一緒に守る約束なので、子どもにとっては、親の様子を見て真似をすればいいということが分かると、すごく楽しくなるような気がする。

ファミリーサポートセンターでは、メンタル面、経済面、DV等、様々な事情で困っている方が本当に増えてきた。ボランティアスタッフでは解決できないことも、民生委員に相談すると支援につながるがよくある。一組織だけではなく、その基本を作る行政と、そのソフトを作る民間と、民生委員等その地域の方たちが、一つのテーブルに着いて、条例ではなく、一つの小さい枠組みのようなものができると良いかと

思う。

【木村議長】 1つの自治会なら自治会だけではなく、民生委員や地区社協の人がいたり、皆で話さないと孤立していく。その地域、皆で集まって、皆で考える、そういうシステムが欲しいが、なかなか上手くいかない。市でそのような話し合いができる場を設けるのが一番いいと思う。

【岩崎委員】 子どもの意見を聞くことが大事。次代を担う子どもたちが“どう思っているのか”というところは、これから本当にどんな場面でも取り上げていかなければならない。家庭教育は子どもを自立させるためのものということであれば、大人側がどうにかしなければならぬ。それを受ける子どもの声にも耳を傾ける必要がある。大人が決めたものを“はい、どうぞよろしく”というのは、もう終わったのではないかと思う。

【木村議長】 会議の終了時間となったので、本日の協議はここまでとさせていただきたい。事務局にお返しする。

【事務局】 個別テーマの協議は、ここで一旦区切りとし、次回はこれまでの協議を振り返る機会とする。

【田村課長】 それでは、本日の社会教育委員会会議は閉会とさせていただく。